

妖女のように
倉橋由美子



妖女のように

定価 五五〇円

著者との話し合いで検印は省略します
初版発行一九六六年一月二十日
八版発行一九七一年十一月三十日

著者◎ 倉橋 由美子

発行者 高橋 直良

発行所 冬樹 社

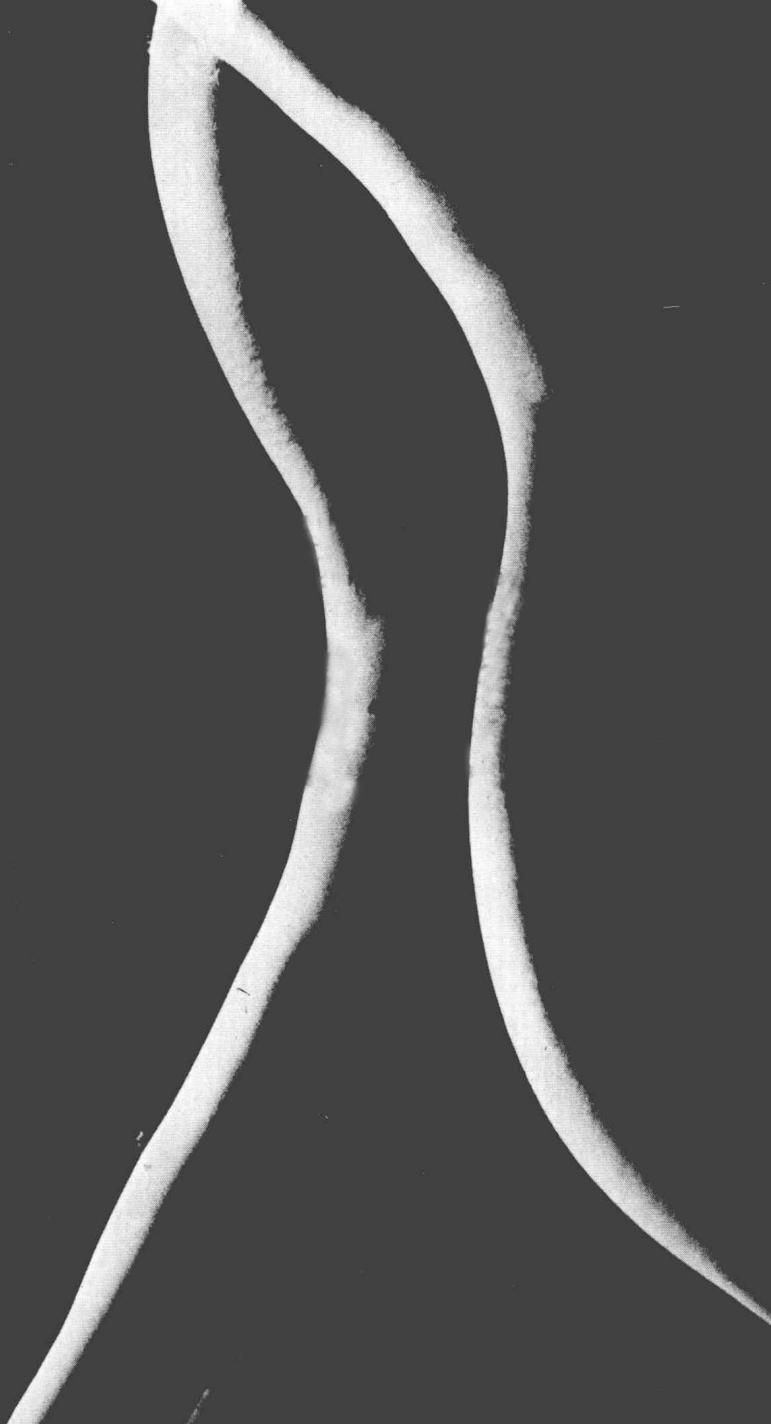
東京都千代田区神田神保町二一八
電話 東京（二六四）〇三四六 代表
郵便番号 一〇 一

印刷所 稲葉印刷株式会社
製本所 一重製本株式会社

妖女のように

倉橋由美子

冬樹社



目次

I 妖女のように

7

II 結婚

69

III 共棲

169

あ
と
が
き

265

装
幀
宅見庄一

妖女のように

倉橋由美子

妖女のように

I

ぶざまにひらかれたこの洞窟はにんげんといふくらい穴への出入口にふさはしい。せいいつばい下顎をひきおろしてみはらしをよくしてもらふのがたてまへだが、そのにんげんのいちらしい努力にもかかはらずなぜかひろびろとはひらかないでひどくだらしない風景となるばかりだ。頑固につばった舌の下に蟹でも隠れてゐるのかやたらに泡をだして治療を妨げ、ソナニツバダサナイデクダサイといへばますますとめどもない分泌がおこるのはせめてにんげんの権利を主張しようといふつもりなのだらう。患者たちは大概ものものしい歯科用椅子にひきすゑられると、観念して口中の修繕をまかせるが、しかしこの他人の口はいつどんな気まぐれによつてがぶりと咬みつくかもしれない、存在するものの穴の底からたちのぼってくる悪意の匂ひにおびやかされる。そこでわたしは尖った金属の武器をとつてことさらに手荒く攻撃するのだけれど、こんな脅しがきくのは子どもの患者くらゐのものだ。しかも子どもはいつたん泣かせるともう手に負へない。

弟は歯科医であり、わたしは目下その助手をつとめることになつてゐる。一日が終ると弟の顔は朝よりもまた皮一枚だけ瘠せて、眼は眼窩のなかに逃げこんでゐる。この急速な憔悴はむしろ老衰に似てゐるので、死んだ父の顔に重なつてくるやうだ。かれが治療室と技工室につづく応接間に朝顔のお化けみたいなウーファーをおき、治療のあひだたえまなく黒人の音楽を再生してゐるのは日常生活の恐怖を遠ざけるためだとしかおもへない。患者たちは地鳴りのやうにきこえてくる音楽に一瞬あつけにとられるがすぐ無視してしまふ。無礼な患者にであふと、死んだ父なら、ワシハヤラソとどなりピンセットとミラーをブラケットのうへにはふり投げてちだんだふむのがなかば公認されたわがままになつてゐたが、弟はいきなりアンプの出力を最大限にまであげて患者を襲にし、自分は左足で、タービンのペダルを踏みつけアフター・ビートをとりはじめるのがせきのやまだ。すると患者は、ケフハ若先生ノ機嫌ガ悪イヤウダ、ドウシテワタシバツカリ嫌ハレルンダラウなどとつぶやきながらすすごとかへつていく。

しかし次の朝にはまたあらたな希望と歯の痛みをかみしめながら門のまへに行列をつくつてゐる患者たちのけはいで眼がさめる。他人を怖れる気持がバキューム・カーのホースよりも長いへその緒となつて伸びてをり、まだ七時まへなのに、患者たちがそれを引つばつてゐるのを感じると、それでもなほ寝てゐるといふことはとてもできない。わたしと弟がほとんど食欲もなく食事をすませてゐるあひだに母が待合室のドアをあけると、行列はくづれて殺到する足がスリッパを奪ひあふのは到着順をあらはす番号をスリッパに書きこんでおいたからである。

どうしてこんなに破損がはげしいのか、町中のひとびとが口のなかを修繕しないと気がすまない

かのやうにつめかけてくるが、とてもさばききれない。それでも待つてゐる患者たちの忍耐づよさを押しかへすことは不可能に近い。ときどき待合室をのぞきにいくと、にんげんのあしのうらに似た顔が並んでゐるのにうちのめされてしまふ。しかもかれらは待合室の雑誌を切りとつたり用をたしたあとの手をカーテンで拭いたり番号の早いスリッパを懷中にいれてもちかへつたりするので油断はできないのだ。あまり待たせると、自分の番はまだかと受付の窓口から治療室をのぞきこむ丸い画鋏のやうな眼がつぎつぎにあらはれ、そんなときのわたしは檻にいれられたにんげんとして大勢の猿たちから嚴重な監視をうけてゐる身だとおもふほどである。

父が死んでから閉鎖されてゐた歯科診療所を弟に再開させるといふ動きが強力な宿縁の蛇となつて弟に巻ぎついたのはこの夏のはじめのことである。弟が歯科医師の免許状とギターひとつをかかへて田舎の町に帰つたといふ知らせをきくと、わたしは無断で夫の家を抜けだして帰省した。このわたしといふのは女の身で小説を書いて金に換へてゐる人間であり、結婚してすでに数年になるが、子どもはつくらず、まずい小説をつくり、月のなかばを仕事のためと称してTOKYOですごし、あとのなかばをKYOTOの夫の家ですごし、半分だけの妻と半分だけの小説書きとを演じてまもなく三十歳を迎へようとしてゐた。夫はわたしが小説を書いてゐることを大目にみてゐるが、ドウセロクナモノガ書ケナクナツテヤメシマフサとたかをくくつてゐるふしもあり、わたしのほうはたかをくくらせたまふ、頻繁に家をあけてはTOKYOのホテルなどで小説を書く。家にゐると壁

は夫の顔、窓は夫ののぞきこむ眼、そしてねそべると夫の腹のうへにゐるやうにおもはれて小説を書く腕は動かうとしない。そこで、弟の開業をきいたわたしは、数年まへにとつた歯科衛生士の資格で弟の助手をつとめることができるのをおもひだし、田舎の家で小説を書くかたはら弟の手伝ひをしてやらうといふ氣をおこしたのだつた。だが診療所は狂氣のやうに繁昌し、日常生活の齒車にはさまれたわたしはここでも小説を書くすべを見失つてしまふ。

母と弟の住む家に歸つたその夜夫から長距離電話がかかり、

「やつぱりお母さんのところへかへつてゐたんだね。いつも黙つてでていかれるのはスリルがあつていいが、いろいろ不都合もあるし、今度から書置きくらゐしておいてほしいな」

「すみません。急に弟がひきあげてきてこちらで開業することになつたのよ」

「さうらしいね。ぼくのところにも開業の案内状がとどいてゐる」

「ちやうど夏休みだし、よろしかつたらあなたもいらつしやつたら？　じつをいふと、開業早々でまだ不備なところが多いから氣が狂ひさうなほど忙しいのよ」

「行つて手伝つてあげたいが、ぼくがあらはれると町の連中がうるさくいふだらう」

「患者に化けていらつしやればいいわ」

「あいにくぼくはムシ齒一本ないんだ。それにきみは齒医者（しやくしや）の娘だからいいが、ぼくの計數工学じや、まるで役にたたないし、まあ、遠慮させてもらおう。ぼくのはうはかまはないから何日でもそちらにゐて手伝つてあげるといいよ。お母さんは？」

「ゐるわよ。あひかはらず台所にゐて電話に耳をすましてゐるやうよ」

「どうもあのひとは苦手なんだな。一応挨拶しとかうか？」

「およしになつたはうがいいわ。挨拶しないとぶつぶついふけれど、したらしたで、ドウセアタシナンカニ用ハナイノニ口先ノ挨拶タケシテ、とかなんとかあとでいふにきまつてるから」

「どうしやうもないね。あのひとのまへにでると、どんなにんげんでも、自分は正しくないといふ氣分に襲はれる。ぼくたちが結婚したことだつて、まるであのひとに対する悪意の証明だともいひたさうだ」

「あたしがあなたと結婚したのは自分を愛してない証拠だといふふうにしかものごとを考へられないにんげんなのよ」

「ぼくたちの結婚をきみの町の連中には秘密にしてあることがあのひとの氣にくはないらしいね」

「母は、自分があなたにもあたしにも愛されてゐないといふことを知つてゐるのよ。死んだ父からも子どもたちからも愛されてないことを知つてから、だれにも愛されないにんげんにならうとすることが母の生甲斐になつたのね。かはいさうなひと」

「ぼくもさうおもふがね。でも同情したところで、それがまたあのひとには怨みのたねになるぢやないか。まあ、こんな話はもうよさうよ」

「あたしが小説を書くことも母はけつして許してゐない。日に一度は、アナタツイフヒトハ鬼ノ眼デ母サンヨミテキルとさもおそろしげにいふわ。アナタハオナカノナカニ鬼ヲ飼ツテキルと……」

「それについてはぼくもききたいね。いつたいどういふ理由でそんな鬼を飼つてゐるのか」

「いつのまにか棲みついちやつたから、なんとなく飼ひ殺しにしてゐるだけよ」

「ぢや、いつそおもひきつてたきだしてしまふんだな」

「それがさうもいかなない事情なのよ。今月だつて、B誌がくひさがつてきて、どうしてもお断りするわけにはいかなかったんですもの。またあの鬼をなだめすかして書いてもらふよりほかないわ」

「注文が断れないから書くといふのかね？　ぼくはさういふことをきいてゐるんぢやないよ。なぜきみが書くかといふことだ。そのわるい習慣みたいなものにどうしてとりつかれてゐるかといふことなんだ」

「ああ怖い、そんなことをいふときのあなたの眼はいつも神さまの眼みたいに複眼だわ。世間の眼といふ複眼だわ。……でも、それは答へられないわね。あたしにもわからない。ことばの世界のはじまるまへのことですから」

「きみのその明晰な大脳で考へて説明してくれよ。だいたい、きみはまへからその明晰さを売りものにしてゐるが、そんなものはひよつとするときみの頭のなかの真珠といふより足の甲なんかにでる魚の眼みたいなものかもしれない」

「さう。醜い眼。けつしてすぎとほつた涙のやうにきれいな眼ぢやないわ。女の小説書きにはしばしばかういふ眼がそなはつてゐるものよ。鬼婆の眼が」

「ぼくはきみのなかに正体不明の鬼が棲みついてゐるのが気になるんだ。その、いつも骨盤のあたりにゐすわつてゐるやつだ。ひとがねしづまつた真夜中にもおきてゐて、紙をがりがりひつかいてゐる化物」

「べつだんお邪魔にもならないでせうに」

「さうはいかないね。ぼくがきみを抱くと、きみはぐったりしてみせても、そいつがきみのほねのあひだでけらけら笑ひだす。すると、ぼくはもうきみに手をだすことができない」

「申訳ないとおもつてます」

「どうだらう、そのしやあしやあとしたいひぐさ」

「ご不自由してらつしやるなら、どうぞほかの女のひととねてください。ご遠慮なく」

「きみが全然嫉妬を感じないとわかつてゐるから、それもできないね」

「ぢや、ひとりで愉しんだら？」

「この年でかね？」

「あたしだつてほんとはそんなに悪人ではないんだから、あなたを夢中にしてあげたいのよ。ところがあなたの掌で撫でられたりまるめられたりやさしい息をふきかけられたりすると、とたんにくすぐつたくてたまらなくなるのよ」

「やさしい愛撫をうけてくすぐつたがるとは不謹慎な話ぢやないか」

「愛シテキル、愛シテキルとあんまり熱心にそのふりをしながらあたしを抱くもんだから、その愛がタンポポの毛のやうにあたしをくすぐるの」

「お芝居だとしても、愛されてゐる役をやるのはうれしくないのかい？」

「それが、こつけないだけ」

「そんならきみを肉屋にぶらさがつてゐる枝肉だと考へよう。好きなやうに切りきざんでやらう」

「そんなことは許さないわ」